

平成 29 年度 第 1 回岡谷市総合教育会議 会議録

以下のとおり、会議内容について報告いたします。

-
- 会議名 平成 29 年度 第 1 回岡谷市総合教育会議
■日 時 平成 29 年 7 月 12 日（月）午後 2 時～3 時 5 分
■場 所 市役所 202 会議室
■出席者 **構 成 員** 今井 竜五市長、岩本 博行教育長、草間 吉幸教育長職務代理者、
橋爪 園美教育委員、太田 博久教育委員、高木 千奈美教育委員、
藤森 一俊教育委員、
市長補佐 小口 明則副市長
事 務 局 岩垂企画政策部長、岡本企画課長、味澤主幹、新村
補助執行 吉澤教育部長、三村教育担当参事、帯川教育総務課長、小坂生涯学習
課長、小松スポーツ振興課長、山田統括主幹、高橋主幹
■会議事項 1 岡谷スタンダードカリキュラムの現状と今後の展開について
2 その他
■配布資料 岡谷スタンダードカリキュラムの現状と今後の展開について
-

1 開会

企画政策部長 定刻となりましたので、平成 29 年度 第 1 回岡谷市総合教育会議を開催します。
最初に、市長よりごあいさつを申し上げます。

2 市長あいさつ

市長 本日はお忙しい中、岡谷市総合教育会議にご出席いただき、誠にありがとうございます。教育長先生ならびに教育委員の皆様方には、日頃より、本市の教育の向上と発展に向けて、大変なご尽力をいただいておりますことに心から感謝申し上げます。

この岡谷市総合教育会議ですが、設置してから早いもので 3 年目を迎えました。初年度には、岡谷市教育大綱と岡谷市のいじめ防止等のための基本方針を策定させていただきまして、昨年度は、教育大綱に基づいて策定された教育委員会の基本方針や学校統合後の様子について、説明を受けたあと、学力保障や特別支援教育などについて意見交換をいたしました。

今年につきましては魅力と活力ある学校づくりを進めている本市において、その取り組みの中心となる「岡谷スタンダードカリキュラム」に焦点を合わせて、開催をさせていただくことになりました。

本日は皆様のご意見をお聞きし、勉強する立場であると考えております。現状や課題等をお聞きしながら、活発に議論できればと思います。簡単ではございますが、私からのごあいさつとさせていただきます。

企画政策部長 ありがとうございました。
続いて、岩本教育長よりごあいさつを申し上げます。

3 教育長あいさつ

教育長 こんにちは。教育委員会を代表して、ひとことご挨拶させていただきます。
市長さんをはじめ、市の関係者の皆さんには、日頃より、教育行政発展のため、ご理解とご協力をいただいておりますこと心より感謝を申し上げます。
今年度、教育委員会では児童生徒の学力向上を推進するため、新たに学力向上アドバイザーを教育総務課内に配置し、積極的に学校訪問を行ない、「わかる、できる」授業の実践に努めています。
本日の会議事項「岡谷スタンダードカリキュラム」は、岡谷市教育大綱の学校教育の5つの重点の1つである「ふるさと岡谷に学ぶ学習の推進」に関わって、岡谷の様々な地域資源を授業に活用する岡谷ならではの学びがあります。岡谷の“ひと・もの・こと”に触れながら行うこの学習は、子どもたちの探究心や知的好奇心を醸成し、新しい学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」につながるとともに、学力向上に直結する取り組みと期待しております。
また、この学習を通して得られる「ふるさと岡谷」への愛着と誇りへ繋がるものと大きく期待しております。本日、この「岡谷スタンダードカリキュラム」について、いろいろな意見をさせていただくことによって、市内各校におけるこの授業実践をよりいっそう実りあるものにしていきたいと思っていますところでございます。どうぞ、本日はよろしくお願いいたします。

企画政策部長 どうもありがとうございました。

4 会議事項1 岡谷スタンダードカリキュラムの現状と今後の展開について

企画政策部長 続きまして、本日の議題に入らせていただきます。
本会議の運営規則に基づき、これ以降の議事進行につきましては小口副市長にお願いします。

副市長 副市長の小口です。それでは、次第に沿って進めさせていただきますのでよろしくお願いいたします。

竹内統合企画員 初めに、本日の会議事項の1番、「岡谷スタンダードカリキュラムの現状と今後の展開について」ということで、統合企画教員の竹内先生・小林先生のお二人の先生から発表をしていただきたいと思います。

竹内統合企画員 それでは、これより「岡谷スタンダードカリキュラムの現状と展開について」ということでプレゼンをさせていただきます。
岡谷市では一昨年度、岡谷市教育大綱を策定し、学校教育の5つの重点を定めました。その1つである「ふるさと岡谷に学ぶ学習の推進」に関わって、ものづくりに代表されるふるさと岡谷の様々な地域資源を活かした、岡谷ならではの教育スタイル「岡谷スタンダードカリキュラム」を構築し、

岡谷の「ひと・もの・こと」に誇りと自信を持ち、郷土を愛する心を醸成したいと考えました。

今回の学校統合は、学校のあり方そのものに加え、岡谷の歴史や文化、教育や産業などの地域の力を見つめ直す絶好の機会でもあると考え、岡谷で育つ子どもたちだからこそできる学びや、大切にしていきたい学びを編制し、この学校統合を契機に、岡谷の全小中学校に展開していくことを構想し、進めてきました。

今回の学校統合は、学校のあり方そのものに加え、岡谷の歴史や文化、教育や産業などの地域の力を見つめ直すチャンスでもあったのです。また、岡谷市では、長年にわたり、学力向上推進委員会を開催し、児童生徒の学力の向上に向け、手立てを練ってきました。

全国学力・学習状況調査の結果分析や、各校の学力向上策の実施により、小中共に学習に関する関心意欲に高まりが見られるようになってくる中で、生活科・総合的な学習の時間、各教科において、体験的・探求的な活動を大切にし、自分で課題を立て情報を集め整理し、調べたことを発表するなどし、日常生活で活用が図れるような学習に取り組むことの重要性が明らかになってきました。

この分析をもとに、学力向上の取り組みに岡谷市が着手する中、今回、国が学習指導要領の改訂に取りかかりました。その新学習指導要領において、国が示してきた改訂の根幹である「主体的・対話的で深い学び」は岡谷市が今まさに進めている学力向上の取り組みそのものでした。

そんな今、統合を契機とした活力ある学校づくりと子どもたちの「主体的・対話的で深い学び」を期する学力向上の柱として、岡谷スタンダードカリキュラムを推進し、知識基盤社会を生きるこれからの子どもたちを育てていきます。

ふるさと岡谷には豊富な学習の素材があり、これらを活かしながら、総合的な学習の時間のほか、理科や社会などの教科・領域において、岡谷ならではの学習要素を取り入れる学習カリキュラムを構築し、岡谷に学び、育つ子どもたちが郷土を誇りに思い、郷土を愛する心とふるさと回帰の心を育みます。それが「岡谷スタンダードカリキュラム」です。

ここに岡谷の「ひと・もの・こと」を代表する素材として、シルクがあります。これは、小学校1年生から6年生における「シルク」が題材となり得る単元です。「シルク」という題材は子どもたちの学びの幅を広げていく可能性を持っています。お蚕様を飼育していくことで、生活科や総合的な学習の時間、特別活動での学習が位置づけられます。

お蚕様の昆虫としての生態に目を向ければ「理科」、繭玉を使ってしおりやコサージュを作れば「図画工作」、その尊いお蚕様の命をいただいて繭玉や絹糸を作っていくことに向き合う「道徳」、成長していくお蚕様の体や繭糸の長さを調べ、量感をつかむ「算数」、製糸業が明治から大正・昭和にかけて、日本の国力向上に果たした役割について考える「社会科」、

絹糸の素材の特徴に触れる「家庭科」、組曲シルクロードの曲想から悠久の営みにイメージを膨らませる「音楽」、そして、これらの学びを整理・記録し、表現していく「国語」など、教科や領域をまたいだ総合的かつ横断的な活動を展開していくことができます。

また、このシルクという題材を通して、多くの「ひと・もの・こと」とがつながっていきます。そして、現在、過去、未来に渡る「時」のつながりを見ることもできます。シルク岡谷を学ぶ上で、出会う「ひと」には、製糸王 片倉兼太郎や諏訪式繰糸機を作った武居代次郎などが考えられます。しかし、子どもたちの「ひと」への出会いは、これらの歴史的偉人だけではなく、シルク岡谷や片倉兼太郎を熱く語る今を生きる「ひと」へとつながっていきます。

製糸王国岡谷と片倉兼太郎の学習を一緒に進めてくださった蚕糸博物館の指導員さんは子どもたちが次々と問いを持ち、それをぶつけてくる姿に驚きを覚えました。そして、世界に歩み出そうとしていた日本と戦争や、当時の岡谷と製糸業、今の日本や自分の生活とを関連させて考えていった子どもたちの姿に、「自分自身がもっと勉強し、子どもたちの役に立ちたいです。これからも子どもたちと学習を続けていくことが楽しみになりました」とおっしゃっていました。

この岡谷スタンダードカリキュラムでは、子どもたちが「岡谷のひと・もの・こと」に学ぶことや、教師が子どもと共に歩もうとする自分自身の軸足を確認するだけではなく、「岡谷のひと・もの・こと」の魅力を子どもに伝える過程でそこに携わる地域の人たち自身もそのよさを見返していきます。大人も子どもも、学ぶことの楽しさを相互に受けとりながら成長していこうとする岡谷の基盤を築くものであります。「岡谷スタンダードカリキュラム」を実践していくこと、それは「学びの互惠性」を高めていく教育活動に他なりません。

ここで、実際の取り組みを紹介します。まずは、「ものづくり ロボットプログラミング授業」です。この取り組みは統合校を対象に総合的な学習の時間を用いて、市内企業の（株）アトラスが信州大学と共同開発した多脚ロボットの無線による操作演習を軸にものづくりの楽しさ、素晴らしさを体感できる学習機会を創出するもので、4年生を対象とした一昨年度から、4・5年生を対象とした昨年度、そして今年は4・5・6年生へと対象を広げてきたものです。

コンピュータでプログラミングをする多脚ロボットを操作する前に子どもたちは多脚ロボットがどのように作られているのか、その仕組みについてのものづくり体験活動を行います。4年生では、たわしにモーターを付けたお掃除ロボットを1人1台ずつ作り、多脚ロボットのフレームの仕組みを理解できるようにします。そのあと、実際のフレームに使われている鉄板を曲げたり、板と板をつなげるためのねじ締めを体験したりします。

5年生では、センサー基盤の仕組みが理解できるように、光センサーと

LEDをはんだでつなげる体験をします。その時の様子を、少し映します
のでご覧ください。

6年生では、ICチップの仕組みを知るために、電卓の解体体験を予定
しております。11月にやる予定です。子どもたちからは「前からロボットや
機械は好きだったけど、ロボット学習をして、もっと好きになりました」
や、「固い鉄だったけど、直角になっていて、それは数千トンもの力で押
し曲げていることが分かって、岡谷市の知識はすごいと思いました」と岡
谷のものづくりに触れた喜びを感じる声があがりました。

次に、シルク岡谷を生かした道徳学習です。ここで取り上げた題材は、照
光寺の蚕霊供養塔です。「蚕霊供養塔が建てられた当時の人々の思いを考
えることを通して、岡谷の製糸業は蚕と共存し命をつなぎ、その犠牲の上
に成り立っていることに思いをいたし、生命が多く命のつながりの中に
あるかけがえのないものであることに気づくこと」をねらいとし、5・6
年生の道徳授業を行いました。

当初、蚕霊供養塔の存在を知らなかった授業者は、岡谷田中小において、
スタンダードカリキュラムの研究部会に所属し、「岡谷スタンダードカリ
キュラム」に触れていく中で、蚕霊供養塔に出会いました。そして、この
塔が建立された意味を知った授業者は、そこに道徳的価値があることを感
じ、その後、自分のクラスの現状や子どもたちの様子を思い描きながら、
道徳の内容項目を絞り込んでいきました。そして、目の前の子もたちと
共に自身も学び進めていきたいのは、生命の尊重であると判断し、この授
業の実践へとつなげていきました。

次は、新しく建設された広域の諏訪湖周クリーンセンターを題材とした社
会科学習です。ごみ収集定位置でのごみ回収や諏訪湖周クリーンセンター、
最終処分場でのごみ処理の様子の見学、リサイクル施設での処理の仕組
みの調査や岡谷市出前講座での体験学習を通して、ごみの処理や利用と自分
たちの生活が深く関わっていることや、これらに関わる対策や事業が計画
的、協力的に進められ、地域の人々の健康な生活の維持と向上に役立って
いることを理解し、ごみの減量や資源の再利用などの自分たちにできるこ
とを考え、進んで取り組もうとすることを目標に、4年生で社会科学習を
実施しました。

クリーンセンターとリサイクル施設成山商店を見学することや、そこでの
ごみ処理の工夫に触れた子どもたちは、自分や友の意見を差し出し合い、
お互いのごみ処理の様子と向き合う中で、ごみ問題が、自分から遠く離れ
た出来事なのではなく、自分の「こと」であり、そこで暮らす自分自身が
岡谷の「ひと」なのだということを感じていきました。

次は、岡谷の生活環境を反映しながら作り上げられてきた食材を題材とし
た家庭科学習です。郷土の保存食材である「塩丸いか」、「信州みそ」、
「岡谷のうなぎ」の特色を調べたり、実際に調理したりすることを通して、
岡谷では気候や文化に適した暮らしが営まれてきたことや、その暮らしは

地域の人たちの様々な工夫や努力に支えられていることに気づき、地域の中でくらししてきた自分自身の成長を振り返り、これからも家族や地域の人たちとともに、よりよい生活を築いていこうとすることを目標とし、6年生で家庭科学習を行いました。

ここに示したのは、子どもたちの学習問題です。6年生の教室では、帰りの会の連絡黒板に次の日の授業の予定を書く時「明日の3・4時間目は社会科、いや違う違う、家庭科でしょ」という会話がなされました。「調理（献立）」、「冬のくらし」、「家庭科学習の振り返り」と家庭科の3つの単元をつなげ、岡谷の「ひと・もの・こと」にふれる家庭科の題材を展開しましたが、子どもたちの学びは長野県の魅力度や幸福度に触れた導入の場面では、社会科のようになり、岡谷の人口密度が長野県一高いことから、その住みやすさを考えていく場面では算数にもなり、地域の中で暮らしてきた自身の成長を振り返る場面では道徳のようにもなりました。

塩抜きをしていない塩丸いかを口にした時の子どもたちの姿、かつて製糸工場だった松亀味噌工場の屋根組の写真を見ながら、そのつながりを真剣に考える表情、岡谷の特産であるうなぎのタレを使った「うなだれ半熟卵かけご飯」を作り食す子どもたちの体、知的好奇心をくすぐられた子どもたちは教師のねらいを遥かに越え、「ひと・もの・こと」の間に介在する関係性や背景を捉えていきました。

そして、この学習を終え、子どもたちが辿り着いた場所は、自分自身でした。この学習の最後に児童のYさんが綴った振り返りです。「ひと・もの・ことに出会った私たち、残り登校日数、今日も含めて14日、統合してこの仲間と新しい伝統をつくっていったのに、別れるのは悲しい・さみしい。でも、伝統があるから、「ひと・もの・こと」を知ることが出来たので、同じ伝統として私たちも出会ったことを忘れたくないと思いました」。

ここには、学校統合という激動の中、愛しい岡谷小を失い、別の地での日々を不安な気持ちを抱きつつも新しい仲間たちと最高学年として同じ岸に立ち、同じ星を見つめてきた「わたしの本当」がありました。

「岡谷スタンダードカリキュラム」を直訳すると「岡谷の標準的な教育課程」ということになるでしょう。これは武井武雄先生や岡谷で作られた工業部品、太鼓祭りなど、「岡谷の『ひと・もの・こと』自体を学ぶ」ことを大切にしていこうというものです。

しかし、「岡谷スタンダードカリキュラム」にはサブタイトルがあります。それは「岡谷ならではの学び」です。そこには「岡谷の『ひと・もの・こと』に学ぶ」という意味が含まれています。つまり、岡谷の「ひと・もの・こと」を通して、教科や学習指導要領の学びをより豊かに、より自分事にしていこうとするものです。

岡谷の「ひと・もの・こと」を学ぶことよりも、岡谷の「ひと・もの・こと」に学ぶことに重きを置く「岡谷スタンダードカリキュラム」はこれを学ばなければならないというフレームの硬直したものではなく、子どもた

ちと先生方、岡谷ならではの学びの中で出会う人たちの手によって、今後、発展し続けていく学びの道筋です。続いて、今後の展開と課題についてお話しします。

「岡谷スタンダードカリキュラム」の目指す方向性は確定した学習内容を、確定した教科や学年で取り組む郷土学習という枠を超え、岡谷で学ぶ子どもたちと先生方、地域に暮らす人たちが、岡谷の「ひと・もの・こと」を通して互いに学び合う双方向のベクトルです。各校の先生方が「岡谷スタンダードカリキュラム」を実践する際、カリキュラム内の素材や題材、実践事例を活用するとともに、実践した上での考察や子どもたちの様子などを市内全小中学校及び全職員で共有していきたいと考えます。教員間及び学校間での実際のやり取りはパソコンの共有フォルダ上にて、昨年度より可能となっています。

どの学校からもカリキュラムの一覧表から、子どもたちとともに実践していきたい内容を選択し、活動を組んでいくことができます。また、それぞれの先生方が取り組んだ事例はパソコン上にアップし、貴重な財産として共有することができます。

加えて、各校の先生方が行った「岡谷のひと・もの・こと」に関する素材研究もパソコン上にアップしてもらうことによって、「岡谷スタンダードカリキュラム」の内容を広げていくことができます。

そうした現状と方向性及び、本カリキュラムの作成、管理に携わってきた我々統合企画教員の引き上げを鑑みた時、今後、「岡谷スタンダードカリキュラム」を持続可能なものにするための課題は次のようなものがあります。

1つ目は「どのように更新していくか」ということです。カリキュラム本体は複雑な要素や視点を絡めて構成されており、本体自体を頻繁に更新していくことは統合企画教員のような立場の教員がいなければ難しいと言えます。仮に担当の校長や教頭、教諭を決め出したとしても、日常の業務の間隙をぬって細目にカリキュラムの内容を更新していくことは物理的に厳しいです。

そこで、実際に更新可能なシステムにしていくためには、次のような方向性が考えられます。カリキュラム本体は、一つのフォームとし、加除修正は行わない。数年後、学習内容や時事の変化に伴い、変更の必要性が生じた場合は学習帳『わたしたちの岡谷』の改訂時のように、委員会を立ち上げ、改訂版岡谷スタンダードカリキュラムの検討、作成を行う。

また、各校において新たに実践された事例を書き加えていくことができるシートを用意し、「岡谷スタンダードカリキュラム」本体に記載の内容以外の事例を付け加えていくようにする。各校において実践された事例と教材研究をパソコン上の共有フォルダに蓄積していくことにより、岡谷スタンダードカリキュラムの実践内容や可能性を広げていくようにします。

その上で問題となるのが、次の2点です。

1 つ目は日常的に誰が「岡谷スタンダードカリキュラム」を管理するかという問題です。

2 つ目は新たな事例や新たな教材研究をパソコン上の共有フォルダに入れる際にどのような手続きをとるかという問題です。

続いての課題は「双方向のやり取りをどの程度盛り込んだシステムにしていくか」です。「岡谷スタンダードカリキュラム」を先生方の使いやすいものに、また血の通ったものにしていくためには、先生方が素材研究に関する悩みや相談事を出し合い、お互いに「岡谷のひと・もの・こと」に関する意味や価値を深めていけるようにしたいと考えます。

そこで、インターネットで言うところの掲示板のようなものを用意し、気軽に相談事を書き込んでいけるシステムが機能すると先生方の授業づくりに生きてくるのではないのでしょうか。現在、パソコンフォルダに「岡谷スタンダードカリキュラム総合掲示板」を設け、その素材を取り上げてみた感想や情報、共有していきたい子どもの学びの姿・エピソード等を書き込めるようにしてあります。その上で問題となるのが、次の点です。

今年度（H29年度）までは総合掲示板に書き込まれた内容をわれわれ統合企画教員が目を通し、質問事項や相談事項があれば回答することができます。しかし、次年度（H30年度）以降は誰が管理していくのかという問題です。

3 つ目の課題は「子どもたちが見学・活動場所を訪れるための交通手段（バスによる移動）の確保」です。岡谷の「ひと・もの・こと」とのつながりを大切にする「岡谷スタンダードカリキュラム」では、実際に現地に赴き、学習対象を自分の目で見て、触れて、体験する活動が重要となってきます。それは新しい学習指導要領における「主体的・対話的で深い学び」の根幹だと言えます。しかし、岡谷の「ひと・もの・こと」素材は多項目かつ広範囲にわたっており、それらに直に触れるためにはバス等の輸送手段が必要となります。すぐに移行措置に入る新学習指導要領では各学年の授業時数が増え、目的地への移動に時間をかけることは不可能になります。また、近年のバス代高騰と家庭間の経済的格差の増大により、行事や学習活動における交通費を保護者に負担させることはますます困難になります。よって、子どもたちが見学・学習場所を訪れるためのバスによる交通手段の確保が欠かせない要件だと言えます。

4 つ目の課題は、「ものづくりロボットプログラミング授業の継続について」です。

まずは、予算ですが、平成27年度から3年間続いた文科省委託事業が来年度は終了し、文科省からの予算付けがなくなります。この授業には、多脚ロボット借用料と材料費がかかります。多脚ロボットの借用料として約80万円（統合2校4～6学年対象時）と、材料費として一人当たり約500円が必要となります。今後、ロボット借用料と材料費をどのように生み出すかが課題となります。

今後、考えられる方向性としては、市による予算化、例えば岡谷市魅力と活力ある学校づくり推進プラン等であり、一人当たりの材料費については各家庭から集めた学年費からの支出です。しかし、先ほどの交通手段の確保の説明と同様、家庭間の経済的格差の増大により、保護者による負担は難しいと言えます。「ロボット授業」における次の課題は、授業者です。これまでは学校統合を契機とする活力ある学校づくり推進事業のための人的加配である我々2名の統合企画教員と岡谷ものづくりフェアの講師をしていただいていた前下諏訪社中学校教諭の小島一生先生とで企画立案し準備を行い、全ての授業を実施してきました。しかし、小島先生はH28年度末で郡外の学校へと異動となりました。また、統合企画教員の任期は今年度H29年度末で終了します。今後、この事業を継続していく上で、最大の課題となるのが、次年度以降、誰が授業をするのかということです。考えられる方向性を、3つ挙げてみました。

1つ目は、市内中学校技術科の先生方を授業者として派遣することです。

2つ目は、学級担任が授業を行う。

3つ目は、岡谷工業高校との連携による岡工生の授業です。

いざ、実際の授業をイメージすると、事前の準備内容も多岐にわたっており、2つ目の担任による授業はほぼ不可能です。1つ目の中学校技術科の先生による授業も小中連携を考えると大変価値のあることではありますが、授業の持ち時間数の関係など乗り越えなければならないハードルがたくさんあります。そう考えると実現可能なものとして、3つ目の岡谷工業高校との連携が最もこの岡谷の優位性と未来性を持った代案であると思われる。先日、この案を携えて、岡谷工業高校の羽毛田校長先生を訪ねました。羽毛田校長先生は大変興味を示され、前向きに考えてくださっています。昨年度、文科省モデル事業における高林蚕糸博物館長との有識者会議を行いました。その席で岡谷市ブランド推進室長さんが「このカリキュラムの内容は市の職員にも是非ともお知らせしたいと思います。そして、私たちもこのカリキュラムの内容を勉強していかなければいけない、理解していかなければいけないと痛感しました」とおっしゃっていました。産業振興と教育との連携の可能性を探る会議の際も「岡谷スタンダードカリキュラム」のプレゼンを聞いた工業振興課長さんがやはり「私たちがもっと勉強しないと」とおっしゃっていました。単に「教育総務課でいいこと考えたね」というのではなく、ブランド推進室も工業振興課も、この「岡谷スタンダードカリキュラム」の取り組みを知り、自分たちも勉強し、自分たちにもできることを共に考えていこうという動きを感じました。

未来の担い手である子どもたちを育てていくことが、将来の岡谷を創っていくことになる。それは直接的な取り組みではない間接的な取り組みであり、未来への種まきです。しかし、よい種を蒔かなければ、よい実はなりません。子どもたちの成長に関わる人たちがそれに気づき共に子どもたちを育てていこうとする。「岡谷スタンダードカリキュラム」はそんな未

来へのスタートラインなのではないでしょうか。以上、プレゼンさせていただきました。ありがとうございました。

副市長

どうもありがとうございました。大変良くまとまった発表でした。

ただいまの発表について感想等あればお伺いしたいと思います。市長さんどうでしょうか？

市長

私たちも初めて聞く内容のところがありまして、現場で先生方には大変ご苦労いただいております。このカリキュラムが動きだして、いろんな可能性を示してくれており、まだ手探りの状態であると思いますが、定着させて発展させていくことを今後は考えていかなければなりません。最後に課題について、お話も頂きまして、解決しなければいけないことは皆で知恵を絞っていかなければいけないと思います。

竹内先生にお伺いします。このカリキュラムは小学校統合を契機に始められたわけですが、各小学校ですでに実践されているのでしょうか？

竹内統合企画員

統合校を契機にということで先ほど、説明させて頂きましたが、岡谷田中小と神明小で先行して実践をさせていただいております。校長会で伝えていただきながら、今、全小学校に対しても昨年度「岡谷スタンダードカリキュラム」を配らせて頂いて、先生方にも周知していただきました。特に湊小は関心を持って頂き、校長先生を中心に岡谷田中小、神明小に負けないうようにと積極的に進めて下さっています。今年度、夏休みの全教職員の研修がありますが、カリキュラムマネジメントという枠の中で行っており、その根幹が「岡谷スタンダードカリキュラム」であるということで、私と小林を中心に他の４校の代表事例を持ち合わせて、先生方に周知を図って、研修を行う予定です。

市長

わかりました。実は昨日、神明小学校の３年生の児童が我が家を尋ねてくれまして、自分たちの住んでいる街（中仙道）を歩いてみようということでした。お手紙を頂きまして、自宅の中を見せてほしいという内容でしたので、見学していただきました。また、２班に分かれて中仙道を歩いたということで、そういうことも地域を知る良い取り組みだったと思います。自分たちの住んでいるところからまず学ぶ。

あと、好きな教科書に「わたしたちの岡谷」というのがあり、改訂版が出来るたびにぜひくださいと話していますが、そういった実践も良いと思います。各校からバラエティに富んだ各学年の取り組みがあるととても楽しいと感じます。

副市長

どうもありがとうございました。教育委員の皆様からもぜひ「岡谷スタンダードカリキュラム」について、ご意見あればお伺いしたいと思います。

草間職務代理

竹内先生にしても、小林先生にしても、統合企画教員になる前に、長い間岡谷で教鞭をとっていて、岡谷の文化を知り尽くしている方々であり、今日の発表を聞くと、我々も岡谷市を再発見・再認識できるものであり、他にはないプログラムになっていると思います。蚕のことをお蚕様と呼んでいた岡谷市の文化を理解した人が岡谷市を育てていかなければ、なかなか

子どもたちには伝わらないし、蚕を育てる気持ちは湧かないと思います。そういう気持ちを先生方に教えて頂いて、子どもたちにとっては非常に良い勉強になっていると思います。

ロボット授業については、官民が協力してやっていかないと、これは学校の先生だけでは難しい場面が出てくるわけですが、あと半年で二人の統合企画教員の先生がいなくなった後、今後岡谷市にカリキュラムを定着していくためには、1年生から6年生までのカリキュラムをきちんと作って、実行できるようにしてもらえるコーディネーター役のような方を配置していただく必要がありますので、ぜひご協力をお願いします。

市長 今お話をいただいたコーディネーター役というのはどのような方が役割を果たせるのかというのがなかなか難しいところですね。授業については一つの提案として岡谷工業高校の生徒に手伝ってもらおうというのがありましたが、その一つ手前として、その方々を引っ張っていく方はどういう方が良いのでしょうか？

草間職務代理 それは先生にお願いするしかないと思います。やはり深い知識を持って、動ける方ですよ。そういう意味で、竹内先生、小林先生のお二方がいなくなってしまうと本当に痛手ですね。

教育長 これについては解決策を考えたいと思っています。

高木教育委員 私は先ほどの「家庭科学習」について、先日、岡谷田中小6年生1組と2組に参加させていただいて、竹内先生がどちらのクラスも授業なさっていました。保存食という点から「塩丸いか」にたどり着くというものだったのですが、保存食というところから、本当にこれは「塩丸いか」にたどり着けるのか、授業としてどうなるのかなという気持ちで見えていましたが、私の考えとは裏腹にどちらのクラスの子どもたちも積極的に発言していて、岡谷のことをこんなにも一生懸命考えているんだということを目の当たりにして、大変感動しました。その中で塩丸いかにたどり着いたときに、竹内先生が授業をされているだけでなく、栄養士の先生が塩丸いかを持ってきて、説明していただいたので、子どもたちにとっても説得力がありました。学校の中で連携して授業を作り上げている姿を見てすばらしいと思いましたし、それが次の地域につながっていくすばらしいカリキュラムだと思いました。

その時思ったことは授業を行う方が教材について、しっかり学んでおかないといけないということです。遠い場所のことを話すなら調べようがないわけですから、そうかもしれないね！で済ませることもできますが、地域の身近のことを教材にした場合は子どもたちと地域のことを追求していくわけですから、授業者が子どもたちと一緒に学んでいく必要があると思います。

特に諏訪地域は若い先生が多く、諏訪圏外から来ている先生にとっては教材を研究しなければいけないという負担があり、「岡谷スタンダードカリキュラム」に取り組もうというところにまでもって行くためには何か後押し

がないとなかなかやってみようという気持ちにはならないので、このカリキュラムがあるだけでは十分でなく、一緒に教材を作り上げていく仕組みがなければ、せっかくこれだけすばらしいカリキュラムがあっても形だけで終わってしまうと思います。今の形を継続していく仕組みが必要だと思います。

太田教育委員 私はこのプレゼンを聞くのは2回目ですが、聞けば聞くほど完璧なカリキュラムだと思います。お二人の先生方が自分たちの異動した後どういう形でこのカリキュラムを続けられるか、環境として整えていただいていることに敬服する思いですが、このカリキュラムの一番のすごさは「学びあい」という考え方の中で、授業実践をすればするほどもっともっと深みが増していった、どこまで良くなっていくかわからないという点が一番大きい点だと思います。草間職務代理や高木教育委員からもお話がありましてとおり、先生方が授業を実践して、それを続けていくことで、岡谷市の教育としてどう育てていくかということが非常に重要なことだと思います。また各学校の先生方が意欲を持って取り組めるところまでどうやってもって行くかということが大切であり、それにはどうしてもこの事を理解されている方がこのカリキュラムを先生方に紹介する期間が必要であり、事例として実践して、先生方がそれに参加されて、「ああ、こういう事なんだ！」と肌で感じる機会を提供する人、リードする方が必要だと思います。それぞれの学校で一人でも二人でも取り組んで頂く方が増えてきて、それが岡谷市の学校全体でまわり始めるのではないかと思います。それまでの間は普及活動をしていただくリーダーが必要であり、そこまで岡谷市教育委員会として、持っていけるよう人と予算を考えなければいけないと思います。最終的には岡谷スタンダードカリキュラムの中で、岡谷のひとづくりに力をいれていくことが出来れば、岡谷の10年先・20年先の未来都市像を担える人材になっていくと感じております。

藤森教育委員 岡谷への回帰ということで将来この岡谷で学んだ子どもたちが外へ出て行って、最後はふるさと岡谷へ帰ってくるということで、子どもの頃に学んだことから、そういう子どもたちを育てていこうという趣旨に大変賛同しております。そういった中で、ものづくりでロボットの話が出てきましたが、岡谷市内の業者の協力のもとにやっておりますが、ロボットというのは子どもたちの中でも興味があり、勉強の中でも面白い教材であるのは間違いないと思います。例えば、そのロボットと岡谷のものづくりがどのように結びついているかという視点も入れるとより深みも出てきて、岡谷にはこんなすごい技術があるんだなと誇りに思ってくれると思います。ぜひカリキュラムを定着させていきたいと思うのですが、これを教育の場に進めていくために、まずは周りの大人が岡谷の良いところ、魅力をもっと良く知って、周りの大人たちがもっともっと岡谷を好きになっていくことが必要だと思います。そういった意味で、学校教育だけではなく生涯学習の場でも、岡谷市の魅力を大人たちに知ってもらい、子どもたちに

伝えていくという環境づくりが必要だと感じました。せっかく子どもたちがカリキュラムを通じて、岡谷の良さを知っても、周りの大人が「岡谷は田舎で大した街じゃない」と話しているようではマイナス効果になることもあるので、カリキュラムを通して、私たちも学んでいくことが大事だと思います。

橋爪教育委員 藤森教育委員の話を伺って、共感した部分があるのですが、実は私は神明小で小林先生の授業でごみ処理について社会科の授業を見学しましたが、子どもたちは自分の身近なことが題材なので、「それ知ってる!」、「それウチにある!!」とノリが良いんですね。良い授業の大切な要素にいかに関心を引き付けるかというものがあるんですが、「岡谷スタンダードカリキュラム」だとそれが自然にクリアされるということを思いました。それと同時にそれを見学している私の中に母親の目線がありまして、先ほど、大人も一緒にという話がありましたが、岡谷にお嫁に来た立場で話しますと、知らないことがたくさんあります。子どもたちがこれを学んでいるところにお家の方々が取り巻くという構図があるとすばらしいものになると思います。このカリキュラムは岡谷全体を良くしていく事に貢献していくものだと思います。教育委員会で作り上げたものというところに決して留めず、市全体で大切にしていけるという共通意識を持っていけたら良いと思います。

副市長 どうもありがとうございました。一通りお話いただきましたが、他にご意見等ありますか？

市長 先ほど皆さんおっしゃってありましたスタンダードカリキュラム「岡谷市のもの・こと・ひと」ですが、子どもじゃなくて、大人にも影響があるという視点が聞いていて面白いと思いました。保護者にとっても目から鱗になる、そういう力のあるカリキュラムだと思います。その後、私と教育長の話は（今後も継続していくために）それをどうするか？というところに最終的にはつなげていかなければいけないわけですが、竹内先生や小林先生にも教えて頂きながら、教育委員さんたちがおっしゃるような形のものを岡谷の中に作りこんでつないでいけるように考えていかなければいけないと思いました。

先ほど、子どもの教育だけではなく、生涯教育であるという話もありましたが、確かに私のようにこの街に長く住んでいても実は知らなかったことがいっぱいあるわけですから、そんなことも自分の街を好きになれる、誇りに思えることだと思います。子どもたちに郷土に誇りを持って、愛してもらって、回帰してもらうことが人口減少の問題にとっても大切なことだと思います。教育委員さんからお話ありましたとおり、先生たちが取り組めるような仕組みづくり、後押しができるよう皆様にお知恵を頂きながら、考えていきたいと思っています。

副市長 それでは最後に教育長先生にまとめていただければと思います。

教育長 まず、この総合教育会議に「岡谷スタンダードカリキュラム」を取り上げ

ていただいたことに本当に感謝しております。私もこれを勉強すればするほど、この学習が岡谷の子どもの将来にとって大事であるという確信が強くなってきております。市長さんから学びの互惠性ということでお話いただきましたが、子どもはもちろん、先生、地域、全ての皆さんがもう一度ふるさと岡谷を見直し、すばらしさを実感することが将来のすばらしい子どもを育てることに繋がると思います。いずれにしてもまずは先生方にこの地域に惚れ込んでもらわなければいけない、それが私の仕事だと思っています。こんなすばらしいところがあると私がいくら伝えても、先生たちが実感して頂かなければいけない。そういった意味で校長会などは市役所で開催するだけではなくて、旧林家に行ってやってみたり、シルクファクトや美術考古館でやったり、いろんなところでやることでまずは校長先生方に岡谷市にはこんな良いところがあるんだということを知っていただき、そして学校に帰ったらそれを先生方に PR していただくという試みをしております。ぜひ先生方の研修は学校の中だけではなく、外でやって頂き、いくらでもすばらしいところがあるので、まずは先生方に惚れ込んでもらいたい。それと地域の皆さんにこんなすばらしいカリキュラムがあるということをもっともっと PR して、ご協力をいただくことも大事であると思います。それは私たち事務局の大きな仕事であると思います。

それから継続性ということで、市長さんからいろいろなお話をいただいて大変ありがたいのですが、私自身もしっかり知恵を出して、これがもっともっと広がり、深まっていくような仕組みを大事にしていきたいと思います。実は今日岡谷東部中学校の学校訪問があり、太田教育委員さんと行ってきました。3年生の廊下に「岡谷市の良さを再発見」という横断がありました。総合学習の時間で中学3年生がもう一度岡谷のすばらしさを見直してみようということで実施したそうです。実は岡谷東部中学校はキャリア教育ということも大事にしております、その一環という意味合いもありまして、子どもたちがこの岡谷のすばらしさを知って、岡谷に住んで、岡谷で働いてということも見通した上で授業を行ったそうです。学習の足跡や感想文も飾っておりまして、それを拝見しましたら、子どもたちもこんなすばらしいところがあるということを知らなかったと。今まで知っているようで知らなかったこともいっぱいあったと。中学3年になってもまだまだ岡谷のすばらしさを充分に知らないで大きくなってきているということに改めて思いました。小学校、あるいはもっと小さい保育園の頃からこういう教育を大事にしていくことが岡谷が元気になっていく一番の元になるのだと思いました。

本当に今日はいろいろなご意見を頂きまして、ありがとうございました。

副市長

ありがとうございました。終了予定時刻を過ぎておりますので、これで議事は閉じさせて頂きます。この後の進行を事務局へお願いしたいと思えます。

企画政策部長

真剣なご意見・ご議論をいただき、ありがとうございました。

次回の開催予定につきましては、現在のところ未定ではございますが、必要に応じて開催してまいりたいと考えております。その際は、改めてご連絡させていただきますので、よろしくお願いいたします。

以上をもちまして、平成29年度 第1回岡谷市総合教育会議を終了いたします。どうもありがとうございました。